

[2013年9月20日]

風疹流行中ならでの出来事？ ワクチン接種12日後に罹患例

IASR速報

神奈川県川崎市健康安全研究所の三崎貴子氏は、同市内で麻疹風疹混合（MR）ワクチン接種の12日後に風疹に罹患した39歳男性に関する報告を行った〔病原微生物検出速報（IASR） 2013年9月18日号〕。男性は今回の風疹流行を受けて市が行った助成事業を利用し、風疹報告数が高いレベルで続いていた今年（2013年）6月にワクチンを接種。その12日後に発疹などの症状が出現していた。その後の遺伝子解析で、男性からはワクチン株ではなく、野生型のウイルスが検出され、ワクチンによる抗体を獲得する前に風疹に罹患したことが分かった。

全ての検体から野生株の遺伝子を検出

この男性は2013年6月、川崎市の助成事業を利用しMRワクチンを接種。接種当時から1カ月以内に家族や友人の麻疹あるいは風疹罹患は確認されていなかった他、職場では中国に出張した社員がいたものの、風疹発症者はいなかったと報告されている。ワクチン接種後12日から顔面を中心に発疹が広がり、14日目に医療機関を受診。麻疹あるいは風疹などのウイルス感染症あるいはワクチンの副反応かを鑑別するため、血液、咽頭ぬぐい液、尿を採取、同研究所でPCRおよびDNAシーケンス解析が実施された。

解析の結果、全ての検体からワクチン株ではなく、野生株（1E）の遺伝子が検出され、男性は自然感染による風疹と確定診断された。同氏は「風疹の潜伏期間は2～3週間であるため、接種の2～9日前に流行株に曝露し、感染したと考えられる」と述べている。

専門家「医師の関心、詳細な調査で詳しい副反応の検討が可能に」

風疹ウイルスおよび同ワクチンの研究者である理化学研究所の加藤茂孝氏は「ワクチンの副反応が大きく取り上げられる中で、このように詳細な調査・解析が行われたことは大変素晴らしい進歩。野生型のウイルスの感染であることが確認されたことにより、ワクチン株の安全性も確認されたと評価できる。接種や診断に関わった医師の注意力や関心の高さも確定診断につながった」とコメント。「風疹に限らず、ワクチン接種後の副反応が疑われる全ての事例について、同様の解析が実施されることが望ましい」と話した。

来年の流行に備え、職場などでの一斉接種を

また、過去のパターンでは風疹の流行期間は3年程度続いていることから、来年も再び流行が起こる可能性があるとして加藤氏。「風疹免疫がない成人男性のうち、今回の流行でまだ感染しなかった、あるいはワクチン未接種の人は数多く存在している。風疹と先天性風疹症候群（CRS）の効果的な予防には、男性の職場などでの一斉接種をいち早く実施することが重要」と述べている。

（坂口 恵）

この記事に対するご意見・お問い合わせは、mtpro-info@medical-tribune.co.jp までお願いします。

関連記事

- ▶ 記事一覧「2013年風疹流行」
- ▶ 記事一覧「2012年風疹流行」

関連リンク

- ▶ <速報> 麻疹風疹混合ワクチン（MRワクチン）接種後に風疹に罹患した成人男性の1例（2013年9月18日IASR）

 [TOPページに戻る](#)